

《感想文》 「大人になれなかった

弟たちに」を読んで

アクトン 中一

このお話は、太平洋戦争中に食べ物がないで弟が死んでしまった作者の回想記です。弟は幼く、疎開先で、栄養失調で死んでしまいました。

戦争をテーマにした話はたくさん読みましたが、実体験の話は初めて読みました。個人的に、物語よりリアルで、「僕」の葛藤が、心に響くものがありました。配給や、甘い物がなかったこと、戦いだけではなく、病でも死んでしまう子供もいるということが、恐ろしいと感じました。さらに、戦争中の人々の立場とその心情が鮮明に描かれていて、弟を愛していたのに、その弟のミルクを盗んで飲んでしまうという矛盾した行動に悲しさを覚えました。

もしも私が「僕」だったら、私も弟のミルクを飲んでしまおうと思います。彼のしたことを正当化するわけではないのですが、「僕」はまだ国民学校四年生、今でいう小学校四年生なのに、戦争という大人でもたえられない極限状態を経験しました。そんな中で、母に分けてもらった食糧では満たされなかったでしょう。もし、飲んでいかなかったら、彼は精神的にも身体的にもすぐに限界がきていたと思います。罪悪感や自己嫌悪、悔しさがしみじみと文面から伝わり、とても現実的で人間らしい文章だと感じました。

私が一番心を打たれた場面は、ヒロユキをおんぶして「三人」で家に帰ってくる最後のシーンです。



悲しみで、なにもかも関係なくなってしまっている様子、呆然とした表現、「三人」と言って死を認めない「僕」、淡々とした文章からいろいろ感じました。「僕」の悲しみと母の言葉に感動しました。

『大人になれなかった弟たちに』を読み、この兄弟のような悲しい家族が、現在戦争中のウクライナやロシアなどにいると思うと心が痛みます。もうこんなことはないように、戦争は終わるべきだと思います。

【評】作者の表現を通して、わずか国民学校四年生の「僕」が罪悪感に苛まれないならなかった戦争の悲惨さや「僕」の深い悲しみを読み取ることができましたね。

《感想文》 私にとつての「やまなし」

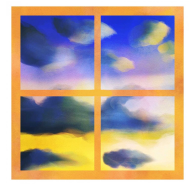
アクトン 小六

初めて『やまなし』を読んだ時は、意味が分からなかったのですが、何度か読むと、表現や場面のちがいを面白く感じるようになりました。「五月」と「十二月」のちがいや、かへの会話、出来事などから宮沢賢治の気持ちも少し知れてよかったです。

「五月」では、「波からくる光のあみが……美しくゆらゆらのびたり縮んだり」、魚が泳いでいたりして、明るいふんいきです。しかし、この場面で、かがくらムボンの死の話をしていたり、かわせみが魚を食べてしまったりして、対照的だと感じました。

「十二月」は、「五月」ほど明るくなく、しんとしていて、落ち着いた様子です。そこにやまなしが落ちてきて、「月明かりの水の中は、やまなしのいいにおいでいっぱいになりました。かに達も幸せそうです。この場面で、宮沢賢治は何げない一日の中で小さな幸せを見つけることが、大切だということとを伝えたかったのだと思います。

最初はわけが分からなかった『やまなし』ですが、いろいろな表現があって、きれいなお話だと思いました。私にとつての小さな幸せは、家のまどから見えるきれいな夕焼けと、お気に入りの毛布をかぶってねることです。



【評】『やまなし』がみんなにじっくり読んでほしい作品だということがよく分かります。〇〇さんが表現の美しさをしっかりとらえ、小さな幸せを確認できて賢治も喜んでると思います。

《日記》 ひみつのブランコ

クロイド 小二

おうちをひっこしました。こんどのおうちは、二かいだてで、わたしは、じ分のへやができました。

にわのうらには森があつて、そこには木にぶら下がったブランコがあります。

名前を「ひみつのブランコ」とつけました。わたしの母と姉と三人でブランコへ行きます。母がわたしをおすとき、いつもメリーゴーランドみたいにぐるぐる回ります。たのしいけれど高く上がるので、すこしこわいです。

ブランコのよこには、小川がながれています。天気の良い日に川の中に足を入れて、ふかいところまで歩いて行きました。水がつめたくてびっくりしました。

これからも「ひみつのブランコ」でいっぱいあそびたいです。

【評】森の中にある「ひみつのブランコ」で楽しく遊ぶ〇〇さんの姿が思い浮かぶようです。様子を表す言葉も上手に使えましたね。

